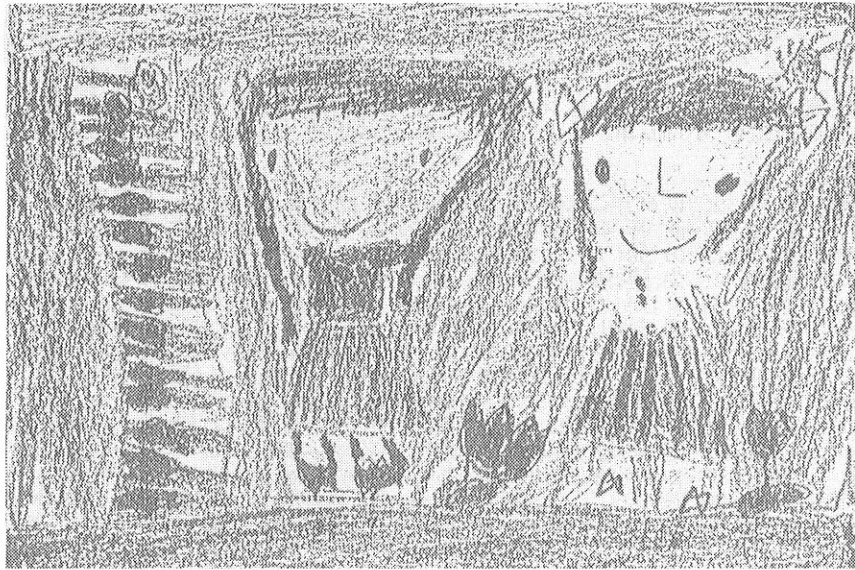


光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替／東京3-128022
 印刷／(株)ドモン企画



おともだち

ふじぐみ おおさか ちさ

復活の信仰 (ルカ・二三・四三)

理事長 福島 勲

聖書ではイエスの十字架を、側面、背面、正面の三カ所から見ている人たちを描いている。ローマの総督ピラトは側面にたつて、地位の安泰、政治的手腕の評価を保とうとして、自らを第三者の立場におこうとする。祭司、学者、パリサイ人らは古めかしい伝統に立って、背面から律法の鏡に映してみている。イエスは神を冒瀆する者、当然死罪に相当するものときめつけ

る。十字架を正面からみる者は、あの三本の十字架の一本に架けられた罪人である。自らの罪を認めて、イエスに願っている。「イエスよ、あなたの御国の権威を持つておいでになる時には、私を思い出して下さい」(ルカ・二三・四三) 御国の権威を持つておいでの時とは、まさしくよみがえりの主イエスを信じ、キリストにより頼む真実な信仰の告白である。死に打ち勝たれたイエス・キ

リストを信じ、われわれもまた天の世界によみがえらせられる。朽ちゆく者が朽ちない生命にいられること、これが信仰の本義である。これなしに何を信じようと言うのか。

クリスマスを祝う者が多い。復活祭をその意義を弁えて心より祝い喜ぶ者が、どれだけあるだろうか。日本のキリスト教は根が浅く、生活の隅々に浸透するところに至っていない。ロシア・カルパチア地方に伝わる、呪術、儀礼、俗信などによると、素朴と思われるが、復活信仰が生きたものであることを教えられる(ボガトイウリョーフ著・千野、近松訳・岩波書店)

パスカ(復活祭用パン)にまつわるものとして、上手に焼けると家族安全とか、家畜が肥える、病が治るなどと言われる。卵についての儀礼には、色を塗る。赤く染めてそれは貧しい人たちに与える。また教会や墓地の近くで火を焚く。それで死

者もともに暖をとる。若者たちは復活節の遊戯を楽しむ。復活節の朝眠つていては麦など育たない。などと伝えられ、そうした生活に生きていく。

何だか迷信じみた、たわいのないことのように思われるが、このうらには、それほどまでによみがえりの信仰が人々の生活の中に密着し根づいていくというのである。

われわれの頭デッカチで、手足の働かない信仰を深く反省しなければならぬ。確かな希望は、復活の信仰によって与えられる。

春がおとずれて、冬枯れの草花に緑の芽が吹き出す頃、生命のよみがえりの象徴として、イエス・キリストのよみがえりを仰ぎみることで、自然とキリストとの契約を、ゆるぎなく確かに認めたい。

げに、イエスはよみがえりたもうたのである。あらゆるものの生命の源として。



正義は愛によって

施設長 今関 公雄

光の子どもの家の歩みも第六年度を迎える。これまでの筆舌に尽くせないお励ましお支えに感謝以外に言葉を探せません。

今年度は、中学生四名、小学生二〇名、幼稚園児五名、幼児一名でスタートしました。何と言っても子どもたちの確かな成長には驚きとともに感動させられます。初めてやってきたときの状況が鮮明なので、ここで暮らした後の目ざましい心身発達が見て取れます。入所以前の生育環境が劣悪だった子どもほど厳しいかわりを要求しますが、その回復と新しい展開も顕著であり養育の手応えを覚えます。

同時に職員も取り組みの厳しさを経過する時間のなかで確実に成長を遂げます。幸い開設当初から志しを同じくしてきた者が大半で、それぞれの持ち場を確かなものにしていきます。夜を日に継いでの過重な労働の連続を思うとき、改めて感謝と畏敬

の念を抱くものです。

ところで福祉事業に苦勞はつきものといわれ、想像を超える先人の苦難に思いをしながら、それ相当の覚悟を迫られます。しかし、あるべき本来的な福祉活動を試みようとするとき、ある種の疑問や義憤を覚えます。

家族と一緒に暮らすことが出来なくなった子どもの持つあらゆる意味の葛藤や痛みを、親や家庭に代わり、治療教育的な意味も含めた濃密な関わりによる養育が必要になります。そのような養育内容を保障するために担当者一人に子ども五名を単位としての家庭的養護に努めていることは何回もお伝えしてきました。これを実現するには公の基準外の職員を最低でも三名の確保が必要です。県単独補助一名分を差し引いた二名を私たちの責任で確保する事になります。それだけでも新しい法人にとっては十分すぎる負荷です。

子どもの年齢の上昇に伴い公

的な人件費は減少し、職員の定期昇給など遅ればせながらも実施すると人件費は増大します。わが国では二〇年ほど前の集団生活を前提にした職員定数などの基準が根本的な見直しが必要ないままです。

普通の家庭でするような生活を養護施設で保障しようとするごく当たり前の「願い」のため必要な職員を配置し、長い関わりを求めることは贅沢なこと、公的には認めないのです。私たちへのご支援の大半は人件費の確保に使われています。子どもたちのためのごく当たり前の「願い」を皆さんの「力」で実現しているわけです。

教育や看護などの改善されなければならぬ「人間にかかわる仕事」のなかで、本当に人間を尊重していく「正義の戦い」と軌を一にするものです。

それは、弱い、小さな、抑圧され、無視されていく傷ついた者たちの群れへの限りない共感と生命への畏敬を核にする人間の回復の運動でもあります。正義は愛によって実現すると思えます。

エッセー チびねこ

中島 睦雄 (彫刻家・県市高校教師)

「子猫が鳴いているよ」オーちゃんと言った。でもユツ子には聞こえない。耳を澄ましてみたが、それっきり鳴き声は聞こえなかった。迷子かも知れないと、二人は家の外にでて、植え込みのあたりを探してみたが、子猫の姿は見えなかった。春の暖かい夜であった。「気のせいじゃないか？」「ううん、たしかに聞こえたよ」「もし、その辺にいたとしても、寒くないから死ぬような事はないよね」二人は小さな上がりはなにサングラスを脱いで部屋にもどった。

オーちゃんもユツ子とともに美術大学の一年生である。大学のキャンパスのすぐ近くの小さなアパートに住んで、部屋が隣り合っていた。オーちゃんは長崎から、ユツ子は埼玉からそれぞれ出てきていて、初めての親の元を離れて淋しい毎日である。学校生活になれることは困難ではないが、一人暮らしで自分の生活のペースをつくる事に

は、慣れるどころか苦しいことの方が多かった。オーちゃんも母親の手紙を読みながら、泣いていることがあった。ユツ子の方も同じで、手紙こそこなかったが病気で入院中の母親の状態を案じ、一番可愛がつくれた年老いた祖母の様子を心配し、一人でときどき泣いていた。「やっぱ子猫が鳴いてるよ」とオーちゃんは言った。

「タバ探したけど見つからなかったじゃない？気のせいよ」「でも、もう一度探してみよう」とその晩は懐中電灯を持って探しに出た。外は暗かった。道の向こう側の大学の三階あたりには、まだ電灯が煌々とついで、課題の制作を続けている学生が残っている様子であった。不意に小声で子猫が鳴いた。

「いたいた」とオーちゃんと言った。植え込みの下などを探していたから見つからない筈で、子猫は桃の木によじ登っていた。「チビチビ、ホラホラ」二人は

子猫を手のひらに抱きとった。両手の中に入る大きさで、充分自分で行動し食事できるほどに成長していて、鳴き声から予想したよりも少し大きかった。少しばかりの体力がついて、自由に歩き回れるようになったものだから、つい母親の守備範囲を越えて遊んで歩き、迷子になったものらしかった。

二人はこの猫を大事にした。桃の木で発見したから「桃子」と名付けようかとも話したが、「チビ」が正式な名になった。チビは二人によくついた。

二人が学校へ行くときは、トイレの掃き出し口の引き戸を少しあけておけば、日中そこから入り、自由に遊んであるいた。時には足のあたりを汚したり、頭に蜘蛛の巣をつけたりしていた。元気のよい猫で、そのうえ賢い面も見せていた。小さな葉っぱ一枚にでも、よくじやれついで、しばらく遊ぶことができた。草むしりをしたときに使った軍手などは、泥で汚れぬれているのに、くわえて持ち運び、まるでネズミをいたぶるようにして遊んだ。特にウオー

クマンのイヤホンが大好きで、机の上から引き落として遊び、使えなくなりました。二人にとって次第に困ったいたずらが多くなってきたが、オーちゃんもユツ子にとつては、もう淋しい下宿住まいの心を、ささやかに潤す存在になっていた。チビの体もだんだんたくましく、しなやかに成長してきた。夜になると、二人のうちのどちらかの布団の中で、まだ小さかった頃と全く同じ様によく眠った。

オーちゃんは言った。「ユツ子ちゃん、うちのチビですごいね」「どうして？」とユツ子は聞いた。「だって私たちはこのチビをね、ポンと捨てる事だつて、極端に言えばひねりつぶす事だつてできるわけよね。だけどそんなこと全然考えず、徹底的に信じきつてるのよね、しあわせよね」ユツ子は低くつぶやいた。

「人間で、こんなに信じきれるものを何か一つでも持つことができるのかしら。それがあつか無いかによって人生が変わってくるのかも知れないわね。」

虹の国から

春

森光子

春にはたくさん木々の芽が吹き出します。これからお話する八ふきのとうも、早い春に芽を出します。

人通りの多い街を少しはずれたる地の片側にせまいのですが竹やぶがありました。夜が明けるところ、竹の葉っぱが、

「さむかったね」

「うん、さむかったよ」

と、ささやくように話していました。雪はまだ残っていました。

そのときどこかで小さい声で

「よいしょ、よいしょ、重たいな」

竹やぶのそばの土からほんの少し芽を出しているふきのとうです。雪が重たくてなかなか出られないのです。

「ああ、外が見たいなあ」

そこでふきのとうは誰かにたのんで雪をどけてもらおうと思

りました。ふきのとうはけんめ

いになって、

「すいません！雪をどかしてください。お願いしまあす」とたのみました。するとしん士はキョロキョロしながら、

「ん、そら耳かな。なんだろう」

なんて言いながら、いつてしまいました。

そして、しばらくすると、きれいな洋服のお化しようをした

きれいな女の人が、誰かと約束したように急ぎ足できました。ふきのとうは早口で

「雪をどけてくださいあ」

すると、女の人は、きつと子どもだろうと思

「ごめんね、おばさん、今いそいでいるの」といいながら急ぎ足でいつてしまいました。

ふきのとうはしよんぼりして

しまいました。しばらくすると、今度は何人

かの子どもたちがワイワイ言いながら、ふきのとうの生えてい

るる地にやってきました。

ふきのとうは、どうせたのんでも聞いてもらえないんだろう、と思いがち

「あう、雪をどかしてくれませんか」と、弱々しく言いました。

すると子どもたちはびつくりしてしまいました。だれもないのに声がしたからです。

子どもたちは、われさきにせまいろ地を走って逃げていつてしまいました。

ふきのとうは、前よりもいつ

そうがっかりしてしまいました。それから、もうお日様が赤くなつてかたむくと、夜になるために夕方があたりをうす暗くしていきました。

そこへ、はたらいてつかれたお母さんと手をつないだみすば

らしい身なりの男の子が歩いてきました。ふきのとうは、これまで元

な大人の人が通りかかっても雪をどけてもらえなかったのだから、どうせ頼んでもダメに決ま

っている、あきらめようと思、だまつていました。

ところが、小さな男の子は、小さなふきのとうのほんの少しの頭を見つけて、走ってきていました。

「わあ、かわいいふきのとうだ。かわいそうに雪におさえられている。かわいそうだよ、お母さん雪をどけてあげようよ、ふきのとうが出られないんだよ」

お母さんにはっこりしてうなずきました。

そして、手を赤くして雪をど

かしてあげました。ふきのとうはとても喜びにみちあふれていました。

ふきのとうは思いました。

りっぱなふくそうのしん士も、すてきな女の人も、元氣な子どもたちも貧しい心なのに、貧しい身なりのこの男の子は、何と

きれいな心をしているんだろう。その夜、ふきのとうは男の子の家について「幸せ」を分けてあげました。

この話は私の作り話です。でも、この男の子のような心の人になりたいと思います。

現場から

暮らしの風景 七

石毛 照子

もう、春の真ん中へんにきて、激しい風が閉めた窓をカタカタ鳴らしています。

「春の風じゃないよ、春の風はもっと優しいんだよ」

「怒ってるんだよ、きつと」

「なんで？」

「お母さんがいないからじゃない、それでだよ、きつと」

入所して五年目の權也と三年目の珠弥ちゃんの前社兄妹が風の中を抜けてくる日ざしが明るいダイニング・ルームで話しています。妹はおしゃべりで兄をリードしますが、負けん気はそろって抜群です。

口も八丁手も八丁の珠弥ちゃん、小学生が登校すると佐藤家に一人になり幼稚園に行くまで、食器の後片づけなどを手伝います。おしゃべり半分水遊びが半分ですが、私が洗って珠弥ちゃんがすすぎます。踏み台に乗り、喜々として手を動かし、私の洗う早さに負けまいと頑張ります。

こんなに楽しくお仕事が出来るらしいなと思うほどです。昨年4月に幼稚園にあがる

きにもほとんど心配はしなかつたけど、この一年、とつてもいい顔で通園でき、いつの間にか

身の回りのことが一人で出来るようになり、お友だちも両手で数えきれなくらいいます。海綿のようにさまざまなこと

をたくさん吸収し、大きく、強くなり、きらめいて生活を楽しんで

んでいるようです。何でもできそうで、気の強い

珠弥ちゃんですがやはり、權也

を頼りにしている妹です。權也は、整理整頓が家で一番

上手で、学校で身につけなければならぬことを、ゆつくりと確実に自分のものにしてきました。優しい心は充分なんです

が、照れ屋でなかなか表現できません。特に自分の妹には。

「おにいちゃん」とよばれて、

「なんだよ」とわざと威張ってみたりします。目は笑っていない

から。二年生になったら剣道をやるんだと目を輝かせて言

っている權也を、珠弥ちゃんは憧れるような顔で見上げます。

前社兄妹の父親はいまだに行方が知れませんが、この五年の間

一度もお会いしてありません。お母さんは二年前の夏においで

になつて以来、年に二、三度ぐらいいはおいでになり、二、三日子どもたちと一緒にここで暮らして下

さいいます。二人とも上手にお母さんに手

紙を書けるようになりました。それでも「お母さんはお母さん、照子さんはママね」と夜

になるとそう言つて

「ママ・・・」と珠弥ちゃんはずが甘えてきます。他の子が

「珠弥ちゃんのママじゃないだろ」と抗議しますが、そうしてバランスしなければ暗い夜をの

り越えることができず、昼の輝きは支えられず、心の健康を維

持することができないのでしよ

う。そんな脆い子どもたちの心なのです。そんな子どもの心には、私にはなす術がありません。どうしていいのかわからなく、

ただじつと見守ることしかできないのです。そんなことより、子どもたちが苦しみ、凍えてい

ることに気がつくことさえできないでいることの何と多いこと

かと不安になります。三六五日のうちの一日ほどはお母さんが一緒にいてくれ

ます。他の日をバランスがきれ

ば・・・などと思ひ求められるま

ま珠弥ちゃんを抱きしめます。

それにしても家族の力の何と多様で大きいことでしょう。

私などより、一年生の權也と一緒にいることで珠弥ちゃんはどう

ぞれだけ安定していられるか、側

にいて痛むほど知らされず、親と一緒に暮らせない子ども

たちは、何とか兄弟だけでも一緒に暮らせたいと私たちは単純に考えました。児童相談所や関係機関などをお願いして、なるべくそのように取り計らって頂いて

現場から
輝きのかたち 13

池田 祐子

高雄君が八六年・十月、一志ちゃん八七年七月、溪子ちゃんが八七年十一月にそれぞれ私が担当として受け容れた。

高雄君→一志ちゃん↓溪子ちゃんという順である。が、年齢は上から、溪子ちゃん↓高雄君↓一志ちゃんという順である。

常識的には、おにいちゃんかききに生まれ弟が後から生まれてくるが、私たちにはそんな常識は通用しない。いきなり弟がきて、次に兄がくることもある。

グループが三人になり、あつという間に二年が過ぎてしまった。私は、ある時、ふつと思つた、神様は、意地悪だ、と。どうして年齢順に子どもたちを送つてくれなかったの、と。

そうしたら、まず溪子ちゃんの甘えを充分受け容れた後で、高雄君、次に一志ちゃんと、うまい具合にいったのになあ、と。しかし、これは胸に手を当ててよく考えなくても、なんとも貧しい思いなのである。

入所してくるのははまった子どもたちの都合ではない、子どもたちはできるだけ入所などしたくないのである。ましてや、かかる私たちの都合に合わせてなんて!

弟に生まれたいと願つて弟になつたでもないし、第一、親だつて男なのかどうだか分からないし、いっぺんに二人や三人六人ということだつてある。

甘えの充足だつてそんなに簡単ではないし、私の思い通りにすれば総てうまくいく、というものは決してない。何ということを考えてのだろう、と恥ずかしくなつてしまう。

グループの持つ「力」や「働き」は多様で不思議である。三人一緒にいると、とても仲よくしている。そこへ私に加わると、足の引つ張り合いになつたりがしばしばで、一志ちゃんをだっこしているが高雄君が「一志ちゃんて、赤ちゃん!」とはやしたてていう。

食卓で、高雄君の姿勢などを注意すると、溪子ちゃんが

「高雄君、怒られてやんの!」
と。また溪子ちゃんの失敗を「溪子ちゃん、そんなことができないで、二年生になんかなれるの?」と一志ちゃんが憎まれぐちを言う。

私が日頃していることや、話し方をそのまま子どもたちが再現する。これだけ影響を与えているのだから、私がちよつと工夫をして関われば、子どもたちはどんどん変わってくる筈である。

高雄君や一志ちゃんのいるところで、年上の溪子ちゃんをやらに叱らない、叱るときなど子どもに痛い思いをさせることには回りの子どもへの影響もよく考える。

一志ちゃんがおねしょをしなかつたことを高雄君や溪子ちゃんと一緒にうんと喜べたりしたら、子どもたちの関係の持ち方やそれぞれの位置などグループのなかの基本的な部分まで変わってくるだろう。ほんの些細な工夫なのである。そうやって、自分の安心できる位置ができ、

グループとしてのまとまりが形造られるのだろう。

春分の日さしのなかで、三人が砂場で遊んでいる。あいにくの風が意地悪をするが、それぞれの役回りが決まっていいて実に仲よくやりとりをして、笑いこぼる一志ちゃん、八重歯をのぞかせて笑い顔を向ける高雄君、立ち上がった一志ちゃんのシャツの砂をポンポン叩いて落としてやる溪子ちゃん。

今日は原田家恒例の野外料理を利根川の河川敷きでする予定だったが、強風のため急ぎよ公園で遊ぶことになり、出かけるのを待つほんの少しの時間さえ惜しんで遊ぶ子どもたち。

この二年間、子どもたちのよりよい関係のためのグループを創る力になれたか自信はない。それでも子どもたちはこんな創造的で意欲的である。そんな意欲や力をさらに発展させるよう、一人一人を確かな眼でみて、工夫していかなければ。

これからもいつまでかは分からないが、一緒に暮らす仲間だもの、よりよい方がいいに決まっているのだから。

自立 その八 入野 隆の場合

菅原 哲男

養護メモ

薩夫は入野家の跡取りとして期待され、さきに生まれた姉とは質的にも量的にも異なつた特別の人として育てられた。分家して初めて自分の創り上げた身代を継がせる祖父の期待のほどは私たちの想像を越えるものだったと思われる。

近距離運送の軽トラックの助手席に幼い薩夫を乗せて走っている頃はもつともよい幸せな時期だつたと祖母は涙ぐんだ。

夕食の食卓で祖父母や自分たちにはコロッケが配られていて一人薩夫の皿には分厚いトンカツが乗っていたと姉は証言する。

こうして学童となつた薩夫は、学校では期待にこたえる位置を獲得することがなく、クラスの中で目立つのは工作などの時間であつたと言う。課題回避の多い生徒で、中学では長期欠席で、留年が検討され、必要出席日数をギリギリでパスし卒業した。

群馬県の私立高校に進んでも学業の状態は改善されなかつた。

夏休みなどは、祖父の手伝いをよくして重宝がられ、お小遣いなどに困るようなことはなかつた。

高校を何とか卒業すると祖父の仕事を手伝い、そのまま今日に至っている。

仕事ももつぱら運転をして走るだけで、営業や経理などはいつさいしないばかりか、初めての取引先に祖父が電話連絡をしておいても、独りでは決して行けなかつたと言う。

八月末の些細な事からの祖父との静いも、いつものように泥だらけの仕事靴を乱雑に脱ぎ捨てて、飯が遅いと体の悪い祖母を責めていた薩夫を祖父が注意し叱つたことが発端であつた。

ここには、乳幼児期の甘えを充分受容された薩夫が、同一化した親を対象化して自立していくための訓練を受ける機会を持たないままで学童期、思春期を過ごし、大人になつても親と同一化したままの生活をしてきた

さまが見てとれる。

自立のために必要な甘えの受容は充分でなければならぬが、それは、人間関係への信頼や愛を信じるなどの人格の基礎部分を形成する故に重要なのである。しかし、人格は原点だけで成り立つものではない。安定した幅の広い基礎部分の上に、どんな構造や機能を築いていくのかがその人の人格を決定するものだと考える。人格が表現されるのは、人間関係の結び方や形成していく過程においてである。

基礎部分で放置されたままの人格の薩夫が、祖父母と別れていく事には反対よりはむしろ遅きに失したことで、困難はあるだろうが賛成である。

隆にとつても、家の中で独裁者のように振る舞いながら、外では荷物を運ぶ以外自分を表現するために、人と話すことさえできない父よりは、困難な事どもに向かい苦闘する大人として向かい合う方が、はるかに貴重であると考えた。

こうして薩夫の思春期か青年前期に克服しなければならなかつた、同一な人格として父母に

甘える事から、自分とは違う他者であることを確認する親離れを三〇才になつて始めたのである。それも、「家出」という若者のような手だてまでして。

祖父母の寂しさや気落ちする様をやわらげ、社会的な手続きとしても、話し合ひ了解を得ることをすすめて、和解し祖父母なども祝福できるように遅まきの自立を図っていく。

実母の露子は、中学校区が薩夫と同じの兼業農家の長女であつた。露子にはすぐ下に双子の妹がいて家の経済は苦しく、早くから家事や農事の手伝い、妹たちの世話や食事の支度など何でもしなければならなかつた。小学校の夏休みの後の国語の授業で、家族で出かけた時のことを作文に書くよう課題が出され、手伝いにあけて出て出かける事など無かつた露子は、書けなくて机に伏して泣いたことさえあつたと涙ぐんで話した。学校の弁当を親に作ってもらつた記憶がなく、忙しいと休むことがあつたが、勉強は厳しい父親に女だからと負けるなど言われ頑張つたと言う。(この項続く)

日誌抄

二月一日
三月二十日

二月一日 小・中学校で風邪蔓延。次々に発熱などで半数以上が通院の毎日。

☆開設以来、毎月初めにお煎餅の大任二任などを欠かさず下さる宮代町の栗原氏。今月も三日 節分。近隣では有名な不動岡不動尊へ。

☆この日から八九年度に子どもたちひとり一人に設定した養護計画のきびしい反省を、四週間にわたって。

五日 江森理容店主の散髪ご奉仕、今月も。ありがとう。

九日 九〇年度に小学校に入学する子どもたちの保護者説明会。うちの子大丈夫かな？

十日 第二一回理事会。祈りだけが頼りの補正予算案承認。

十一日 北埼玉地区少年剣道大会が北川辺町を会場に。確実に力をつけてきている子どもたちの顔もたのしく。

十三日 毎年、子どもたちに寒い思いをさせないようにと灯油のご寄贈を下さる北本市の向後氏今年も。感謝。

二五日 田園調布教会の田崎さんよりりっぱなエレクトーンが。ありがとう。

二八日 NHK歳末助け合いより冷凍庫をいただく。感謝。☆浦和市自治協力連合会のかたがた来訪して見学など。

三月一日 明日からの中学生の期末テストのために竹下由布子先生が臨時のご指導に。竹

下先生は県立久喜高校の若い素敵な音楽教師。昨年四月より学習指導のボランティアにきて下さり、熱心がこうじて囑託職員に。毎週先生がこられる日はやんちゃな子どもたちもシャキッ。おかげで、ここに来るまで学校にも行かなかった中学生などの学力もすっかりしてきて、すっかり仲

良しになり心待ちして。

二日 町内の並木氏より本をたくさんいただく。感謝。

三日 幼稚園のおひな祭りお遊戯会。年長の三人の最後の入魂の演技に拍手。年中さんを入園の頃の心配がうそのようにすっかりお姉さんになりました。鑑賞しながら先生方のご苦労や子どもたちへの愛情

などを思い感動と感謝を。☆町内の秋山さんよりお餅をたくさん。ありがとう。

四日 大阪府の養護施設池島寮の鳴海先生が研修と交歓に、六日まで。

八日 宮代町の宮沢さんより日用品のご寄贈。感謝。

九日 所沢児童相談所へ入所予定の永井環君（四才）と面会。担当の竹下保母とよく似た坂巻指導員が入所時の不安の解消と光の子どもの家の説明に。

十日 町内の川田さんより野菜や食品をたくさん。感謝。

十一日 三月で自家に帰る隆と香住が一緒の虹の会のピクニックを赤城山へ。楽しい一日。

十三日 永井環君入所。原田家竹下保母担当。定員一名超過。

☆光の子どもの家後援会設立発起人会開催。五月設立を予定。

十四日 大阪中央児相の渡辺さん研修と交歓に一泊で。

十七日 五来淑子保母、永井環君の入所に備え着任。

十九日 朝日新聞の取材。

二十日 幼稚園謝恩会。

今年度も頑張ります。ご支援を心からお願ひします！（くら）

反射光

復活の主を心からお慶び申し上げます。本当に

枯れてしまったように見えたり照葉樹という素敵な名の木々が園庭に淡い色をたえたえはじめの復活を証しています☆いよいよ新学期。毎年この時期は不安や寂しさを感じさせられます☆今年も三名が幼稚園の素敵な時間を終えて学校教育という競争社会へ出かれます。やりきれないほどの不安を感じます。こんな思いを学校の先生どうぞお分かり下さい☆昨年初夏、ふらりとやってきて私たちを助けてくれた五木田供三さんが神奈川に帰ります。黙々と敵しい働きをこなして見せ、何でも自分でする事の楽しさも示してくれました。感謝とともに人の出会いの不思議さを思わされます☆三頁に中島先生が、設立当初から熱心にお励まし下さる町内の良心のようなその人がらをしのばせる素敵なエッセーを書いて下さいました☆退所を見越した入所が年度末に相次いで体制づくりを早め、前のめりになって新年度を始めました。ご支援を！（哲）